

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problems Mailbox.**

IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

In re application of

Kenta Hori

Batch:

Serial No.: NEW APPLICATION

Group Art Unit:

Filed: December 3, 2001

Examiner:

For: METHOD AND PROGRAM FOR PREVENTING UNFAIR USE OF SOFTWARE

J1050 U.S. PTO
10/008917
12/03/01

CLAIM FOR PRIORITY

Assistant Commissioner for Patents
Washington, D.C. 20231

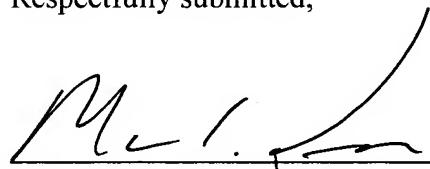
Sir:

The benefit of the filing date of the following prior foreign application filed in the following country is hereby requested for the above-identified application and the priority provided in 35 U.S.C. § 119 is hereby claimed:

JAPAN 2000-370630 December 5, 2000

In support of this claim, a certified copy of said original foreign application is filed herewith. It is requested that the file of this application be marked to indicate that the requirements of 35 U.S.C. 119 have been fulfilled and that the Patent and Trademark Office kindly acknowledge receipt of this document.

Respectfully submitted,


Marc A. Rossi

Registration No. 31,923

12-03-01
Date

Attorney Docket: IIZU:011

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日

Date of Application:

2000年12月 5日

出願番号

Application Number:

特願2000-370630

出願人

Applicant(s):

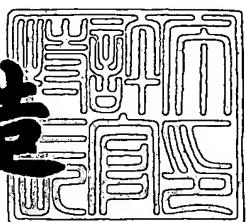
堀 健太



2001年11月16日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

及川耕造



出証番号 出証特2001-3099961

【書類名】 特許願

【整理番号】 P0012

【あて先】 特許庁長官 及川 耕造 殿

【国際特許分類】 G09C 5/00

【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県相模原市古淵一丁目23番9号

【氏名】 堀 健太

【特許出願人】

【住所又は居所】 神奈川県相模原市古淵一丁目23番9号

【氏名又は名称】 堀 健太

【代理人】

【識別番号】 100077539

【弁理士】

【氏名又は名称】 飯塚 義仁

【電話番号】 03-5802-1811

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 034809

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【ブルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 ソフトウエアの不正利用防止方法及び記憶媒体

【特許請求の範囲】

【請求項1】 ユーザーのコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する第1のステップと、

前記第1のステップで生成した固有情報に基づきソフトウエアのライセンス提供者の側でキーデータを生成し、該キーデータを前記ユーザに提供する第2のステップと、

前記ソフトウエアを利用しようとするコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する第3のステップと、

前記キーデータに対応する前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報との一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウエアの利用可否を判定する第4のステップと

を具備するソフトウエアの不正利用防止方法。

【請求項2】 前記ユーザに提供された前記キーデータから前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報を復元するステップを具備し、

前記第4のステップでは、前記復元されたファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報を比較し、両情報の一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウエアの利用可否を判定する請求項1に記載のソフトウエアの不正利用防止方法。

【請求項3】 前記第2のステップでは、所定の変換アルゴリズムに従って前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報を前記キーデータに変換し、

前記固有情報を復元するステップでは、前記所定の変換アルゴリズムの逆変換によって、前記キーデータから前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報を復元する請求項2に記載のソフトウエアの不正利用防止方法。

【請求項4】 前記第1及び第3のステップにおいて、コンピュータのファ

イルシステム情報を読み取ることにより前記ファイルシステムの特徴を検出する請求項1乃至3のいずれかに記載のソフトウェアの不正利用防止方法。

【請求項5】 前記第4のステップでは、前記キーデータに対応する前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報との差分を計算し、この差分の大きさに応じて前記ソフトウェアの利用可否を判定する請求項1乃至4のいずれかに記載のソフトウェアの不正利用防止方法。

【請求項6】 前記第4のステップは、前記ソフトウェアを前記コンピュータにインストールするとき、あるいは、前記ソフトウェアを前記コンピュータで起動するとき、あるいは、前記ソフトウェアを前記コンピュータでコピーしようとするとき、のいずれか少なくとも1つの時点で実行され、該第4のステップで利用不可と判定されたならばその利用を禁止する請求項1乃至5のいずれかに記載のソフトウェアの不正利用防止方法。

【請求項7】 前記第2のステップでユーザに提供された前記キーデータを保存するステップと、

前記第4のステップで前記ソフトウェアが利用可と判定されたことを少なくとも一つの条件として、前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報に適合するように前記保存されたキーデータの内容を更新するステップと

を更に具備する請求項1乃至6のいずれかに記載のソフトウェアの不正利用防止方法。

【請求項8】 コンピュータ読み取り可能な記憶媒体であって、コンピュータのソフトウェアの不正利用を防止する方法を前記コンピュータに実行させるためのプログラムを記憶しており、このプログラムは、

ユーザーのコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づく固有情報を出力する第1のステップであって、これにより、該ファイルシステムの特徴に基づく固有情報が前記ソフトウェアのライセンス提供者に対して送付されて該ライセンス提供者の側で該固有情報に対応する固有のキーデータが生成されることを可能にすることと、

前記生成されたキーデータを前記ライセンス提供者の側から受け取る第2のステップと、

前記ソフトウェアを利用しようとするコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する第3のステップと、

前記キーデータに対応する前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報との一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウェアの利用可否を判定する第4のステップと

を具備する。

【請求項9】 前記プログラムは、前記第2のステップでユーザに提供された前記キーデータを保存するステップと、前記第4のステップで前記ソフトウェアが利用可と判定されたことを少なくとも一つの条件として、前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報に適合するように前記保存されたキーデータの内容を更新するステップとを更に具備する請求項8に記載の記録媒体。

【請求項10】 第1のステップでは、前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報をネットワークを介して前記ソフトウェアのライセンス提供者に対して送付し、前記第2のステップでは、前記ライセンス提供者の側で生成された前記キーデータをネットワークを介して受け取る請求項8又は9に記載の記録媒体。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、ソフトウェアの不正利用防止方法及び該方法に係るプログラムを記憶した記憶媒体に関し、特に、ソフトウェアを正規に利用する特定のコンピュータに固有のキーデータを使用することで別コンピュータでの該ソフトウェアの不正利用を防止するようにしたものであり、例えばインストールされたソフトウェアを使用する際の不正利用防止、あるいはソフトウェアをコンピュータにインス

トルする際の不正コピー防止などに役立つものである。

【0002】

【従来の技術】

ソフトウェアの不正使用もしくは不正コピーを防止する従来の技術の代表的なものは、パスワードの入力による方法である。これは、ライセンス提供者から取得した所定のパスワードを入力した場合にだけソフトウェアの使用もしくはコピーを許可する方式である。しかし、この方式では、同じパスワードを用いさえすれば別のコンピュータで同じソフトウェアを使用もしくはコピーすることができるし、また、パスワードは他人に簡単に伝えることができるため、不正コピー防止という意味では明らかに不完全であり、ソフトウェア著作者の権利を保護しきれない。

【0003】

ソフトウェアの不正コピーをより確実に防止するためにハードウェアキーの方法も用いられている。これは、特定の情報をもったハードウェアを鍵として用いるもので、そのハードウェアがコンピュータに結合されているかどうかを判定してソフトウェアの利用を許可する方法である。キーとなるハードウェアは容易にコピーできないため、この方法によればより確実に不正コピーを防止することができるが、コストが大きいために一部の高価なソフトウェアにしか適用できないという問題がある。また、この方法は、通信ネットワークを介してオンラインで手軽にソフトウェア提供・売買を行なう最近のソフトウェア流通形態には全く不適である。

【0004】

上記と類似の機能を安価に実現するために、安価な記録媒体を用いた不正コピー防止方法がある。これは、フロッピーディスク等の可搬性の記録媒体に記録した形態でソフトウェアを提供し、インストール実行時に所定のデータを該記録媒体に書き加えることにより、この記録媒体を用いての次回以降のインストールを制限する方法である。しかし、ソフトウェア流通に際しては可搬性の記録媒体に記録された形態をとることを要するため、この方法もまた、通信ネットワークを介してオンラインで手軽にソフトウェア提供・売買を行なう最近のソフトウェア

流通形態には全く不適である。また、記録媒体の読み書き装置を具備していないコンピュータには適用できない、正規のユーザーが該ソフトウェアを再インストールする時に別の新しい記録媒体が必要になる、などの不具合を生ずる。

【0005】

以上のように、コンピュータを特定する固有情報を利用しない不正コピー防止方法では、それだけでは他のコンピュータへの不正コピーを防止することができない。すなわち、同じ記録媒体やシリアル番号あるいはパスワードなどのキーデータを用いて容易にコピーできるという問題があった。

一方、このような容易な不正コピーを回避する方法としてオペレーティングシステムに固有の情報を利用して不正コピーを防止する方法が考えられている。これは、個別コンピュータのオペレーティングシステム毎に固有のID番号を付与し、ソフトウェアの側では自己に専用のオペレーティングシステムID番号を認識しうるよう鍵情報を持ち、該ソフトウェアを利用しようとするコンピュータのオペレーティングシステムのID番号を該ソフトウェア側の鍵情報を用いて照合することで該OSを具えたコンピュータにおける該ソフトウェアの利用可否を判定するようにしたものである。この方法は上述の従来例に比べて不正コピーを有效地に防止することができるが、対象ソフトウェアのプログラムは各オペレーティングシステム毎に異なったプログラムとして作成されねばならぬので、ソフトウェアの作成手間がかかるという問題がある。加えて、最近流通してきている異なるどんなOSでも動作しうる「クロスプラットホーム」タイプのソフトウェアには適用することができない、という問題がある。

【0006】

【本発明が解決しようとする課題】

本発明は上述の種々の不具合若しくは問題を解決するためになされたもので、ハードウエアキーや可搬性記録媒体を必要とすることなく、また、オペレーティングシステムの制限を受けることなく、ソフトウェア処理だけで、対象とするソフトウェアの不正利用を防止しうる方法及び該方法に係るプログラムを記憶した記憶波媒体を提供しようとするものである。

【0007】

【課題を解決するための手段】

本発明に係るソフトウェア不正利用防止方法は、ユーザーのコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する第1のステップと、前記第1のステップで生成した固有情報に基づきソフトウェアのライセンス提供者の側でキーデータを生成し、該キーデータを前記ユーザに提供する第2のステップと、前記ソフトウェアを利用しようとするコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する第3のステップと、前記キーデータに対応する前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報との一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウェアの利用可否を判定する第4のステップとを具備する。

一例として、前記ユーザに提供された前記キーデータから前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報を復元するステップを具備し、前記第4のステップでは、前記復元されたファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報とを比較し、両情報の一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウェアの利用可否を判定する。

【0008】

本発明に係る方法の概略を説明する。

まず、ユーザーに対して固有のキーデータを発行するための前段階の処理として、該ユーザーが使用する特定のコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する（第1のステップ）。このユーザーとは、例えば対象とするソフトウェアを正規に購入した若しくは購入の意志を示した者である。コンピュータのファイルシステムの特徴の検出は、例えば、コンピュータのファイルシステム情報を読み取ることにより行える。このファイルシステム情報は、個別のコンピュータ毎に固有の、いわば「指紋」のような、情報である。つまり、或るユーザーのコンピュータ（特定のコンピュータ）のファイルシステムは、そのユーザーに特有のファイル使用履歴を示しており、これを固有情報として利用することができる。この第1のステップは、コンピュータのファイルシステムの特徴を検出する（例えばファイルステ

ム情報を読み取る)処理で済むため、純ソフトウェア処理で遂行でき、特別のハードウエアキーや可搬性記録媒体が不要である。

【0009】

ユーザー側のコンピュータで読み取られたファイルシステム情報に基づく固有情報は、通信ネットワークを介して、あるいはその他任意の手段を介して、ソフトウェアのライセンス提供者に渡される。ソフトウェアのライセンス提供者の側では、該ファイルシステムの特徴に基づく固有情報に基づき、固有のキーデータを生成する(第2のステップ)。例えば、所定の暗号化アルゴリズムに従って該ファイルシステムの特徴に基づく固有情報を変換することで固有のキーデータを生成する。生成されたキーデータは、通信ネットワークを介して、あるいはその他任意の手段を介して、ユーザーに提供される。こうして、ライセンス提供者によってユーザーに対して上記キーデータが発行されることにより、該ユーザーがオーソライズされる(いわばユーザー登録がなされる)。

【0010】

ユーザー側では、ソフトウェアを利用しようとするコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、該検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する(第3のステップ)。このファイルシステムの特徴の検出も、例えばコンピュータのファイルシステム情報を読み取ることにより行える。ここで、以下、読み取ったファイルシステム情報に基づく固有情報を、便宜上、「現在のファイルシステム情報」ということにする。ここでいう「現在」とは、厳密な今の時点であることを要せず、今よりも適宜前の時点(ただし上記キーデータ作成時以降)でのファイルシステム情報であってもよい。

【0011】

ユーザー側では、前記キーデータに対応する前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報(つまり「現在のファイルシステム情報」との一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウェアの利用可否を判定する(第4のステップ))。この場合、ユーザ側では、提供されたキーデータから前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報を復元するステップを具備するとよい。この復元は、例えば、前

記所定の暗号化アルゴリズムの逆変換を行なうことにより、行なえる。その場合は、前記第4のステップでは、前記復元されたファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報とを比較し、両情報の一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウェアの利用可否を判定することになる。別の例として、前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報（つまり「現在のファイルシステム情報」）をキーデータに変換し、前記第4のステップでは、前記提供されたキーデータと変換したキーデータとを比較することで、前記ソフトウェアの利用可否を判定するようにしてもよい。要は、ファイルシステムの特徴に基づきソフトウェアの利用可否を判定を行うようになっていればよい。

なお、ユーザ側では、ライセンス提供者から提供されたキーデータを適宜保存しておき、保存したキーデータに基づき該ファイルシステム情報に基づく固有情報を復元するようにするとよい。しかし、ユーザー側でのキーデータの保存は必ずしも必須ではなく、例えば必要なときにライセンス提供者から提供を受けるやり方もあり得る。

【0012】

例えば、キーデータ作成時つまり登録時からみて、ユーザー側のコンピュータのファイルシステム情報に変更がなければ、両ファイルシステム情報が一致する。これは、ユーザー側の現在のコンピュータが、登録時のキーデータ作成の元となつたファイルシステム情報に係るコンピュータと明らかに同一であることを意味する。よって、ソフトウェアの利用を許可するのは勿論である。例えば、ユーザー登録時に続けてこの第4のステップを実行する場合がそのような完全一致のケースに該当する。

ユーザー側のコンピュータの使用に伴つてそのファイルシステム情報の内容が当然変わってくる。そのような場合、前記キーデータから復元されたファイルシステム情報と前記第3のステップで検出された「現在のファイルシステム情報」とは相違してくるが、前記第4のステップでは両者の相違が許容範囲内であれば、類似性を認め、ユーザー側で使用するコンピュータに変わりがないと認定して、ソフトウェアの利用を許可する。一方、登録時にオーソライズされたコンピュ

ータ（キーデータを作成する元となったファイルシステム情報に係るコンピュータ）以外の他のコンピュータで当該ソフトウェアを利用しようとするときには、前記第3のステップで検出された「現在のファイルシステム情報」は、当該他のコンピュータのファイルシステム情報であるから、前記キーデータに基づき復元したファイルシステム情報とは、かなり相違する。よって、前記第4のステップでは両者に一致又は類似性がない、つまり両者の相違が許容範囲外、と判定し、ソフトウェアの利用を不可とする。

【0013】

このように、本発明によれば、ユーザー側の個別コンピュータに固有の情報として該コンピュータのファイルシステム情報に着目し、該ファイルシステム情報に基づき個別コンピュータに固有のキーデータを作成して、ソフトウェアを利用しようとするコンピュータにおけるファイルシステム情報を該キーデータを用いて評価することでその利用の可否を判定するようにしたので、完全なソフトウェア処理ベースで不正利用を防止することができ、通信ネットワークを介して流通するソフトウェアの不正利用防止対策として最適であり、また、ハードウェアキーが不要であり、格別の可搬性記録媒体の形態で対象ソフトウェアを提供しなければならないような面倒もなく、ローコストであり、ソフトウェア提供者の側において各オペレーティングシステム毎に対象ソフトウェアを作成しなければならない面倒もなく、更には、オペレーティングシステムによる制限を受けないので「クロスプラットホーム」タイプのソフトウェアにも適用することができる、等々の優れた効果を奏する。

【0014】

なお、コンピュータにおけるソフトウェアの利用とは、様々な利用形態を全て含む。例えば、①ソフトウェアをコンピュータにインストールすること、②インストールされたソフトウェアをコンピュータで起動して、実際にそのプログラムを実行すること、あるいは、③ソフトウェアをコピーすること、などがある。よって、前記第4のステップにおける利用可否判定は、例えば、①ソフトウェアをコンピュータにインストールするとき、あるいは、②ソフトウェアをコンピュータで起動するとき（ソフトウェアのプログラムをスタートするとき）、あるいは

、③ソフトウェアをコピーしようとするとき、のいずれか少なくとも1つの時点で実行すればよい。ここで利用不可と判定されたならばその利用を禁止する、つまり、①インストール処理を中止する、あるいは、②当該ソフトウェアの起動を禁止する、あるいは、③ソフトウェアのコピーを禁止する。通常は、①インストールの禁止と②ソフトウェアの起動禁止とを行なえば、仮りにコピーは可能であったとして、該ソフトウェアの不正利用を差し止めることができるので、上記①インストールの禁止と②ソフトウェアの起動禁止の少なくとも一方を行なえば十分である。勿論、これに限らず、③ソフトウェアのコピーを禁止することのみを行なっても、ソフトウェアの不正利用を防止する効果をあげることが可能である。要するに、前記第4のステップにおける利用可否判定は、どのような時点で行なっても、それなりに、本発明に特有の効果を奏することができる。

【0015】

また、第4のステップで行なうファイルシステム情報の比較法には種々の手法がありうるので、適宜の手法を採用してよい。一例として、個々のファイルの一致／不一致を比較・判定し、その一致／不一致の度合いからファイルシステム情報全体としての類似度合いを判定する。かかる判定を計量的に行なう一手法として、両ファイルシステム情報の差分若しくは不一致の関数値を計算し、この差分若しくは関数値の大きさに応じて前記ソフトウェアの利用可否を判定する。別の手法としては、パターン認識的手法により両ファイルシステム情報の類似性を判定することが可能である。

【0016】

ところで、ソフトウェア提供者によってオーソライズされたコンピュータであっても、使用に伴ってそのファイルシステム情報がどんどん変化してゆく。そのため、そのままでは、キーデータによって復元される元の（ユーザー登録時の）ファイルシステム情報と現在のファイルシステム情報との相違が大きくなり、許容範囲を越えて、非類似と判定されることになりかねない。これに対処するためには、現在のファイルシステム情報に適合するように、キーデータの内容を適応更新するとよい。すなわち、ユーザ側のコンピュータにおいてキーデータを保存しておき、前記第4のステップでは、保存されたキーデータを用いて判定処理を行

う（例えば保存されたキーデータから元のファイルシステム情報を復元して、比較処理に用いる）。そして、前記第4のステップで前記ソフトウェアが利用可と判定されたことを少なくとも一つの条件として、前記第3のステップで検出されたファイルシステム情報に適合するように前記保存されたキーデータの内容を更新するステップを更に具備するものとする。第4のステップでソフトウェアが利用可と判定されたことを少なくとも一つの条件とする理由は、正規利用が確認されたときだけ、キーデータの内容を適応更新するためである。更に適宜の条件を付加してキーデータの内容の適応更新を行なうようにしてもよい。例えば、第4のステップでソフトウェアが利用可と判定されるごとに常に更新を行なうようにするのが最善であるが、これに限らず、適当な時間間隔で更新を行なうという条件を付加してもよい。

【0017】

本発明は、方法の発明として実施できるのみならず、該方法に係るプログラムを記憶した記憶媒体の形態で実施することができる。すなわち、本発明に係るコンピュータ読み取り可能な記憶媒体は、コンピュータのソフトウェアの不正利用を防止する方法を前記コンピュータに実行させるためのプログラムを記憶しており、このプログラムは、ユーザーのコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づく固有情報を出力する第1のステップであって、これにより、該ファイルシステムの特徴に基づく固有情報が前記ソフトウェアのライセンス提供者に対して送付されて該ライセンス提供者の側で該固有情報に対応する固有のキーデータが生成されることを可能にすることと、前記生成されたキーデータを前記ライセンス提供者の側から受け取る第2のステップと、前記ソフトウェアを利用しようとするコンピュータのファイルシステムの特徴を検出し、検出したファイルシステムの特徴に基づき固有情報を生成する第3のステップと、前記キーデータに対応する前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報と前記第3のステップで生成された前記ファイルシステムの特徴に基づく固有情報との一致若しくは類似性に基づき前記ソフトウェアの利用可否を判定する第4のステップとを具備する。

【0018】

【発明の実施の形態】

以下、本発明の一実施形態を添付図面に基づき詳細に説明する。

図1は本発明に係るソフトウェアの不正利用防止方法の原理を説明する機能ブロック図であり、ブロック10はソフトウェアライセンス提供者（以下、ライセンサーという）側のコンピュータシステムを示し、ブロック20はソフトウェア使用者（以下、ユーザーという）側のコンピュータシステムを示す。

【0019】

ユーザー側のコンピュータシステム20においては、周知のようにコンピュータハードウェア21に適宜のオペレーティングシステム（以下、OSと略称する）22が搭載され、その記憶装置において種々のプログラムやデータの「ファイル」が蓄積されてファイルシステム23を構築している。このファイルシステム23は通常知られているようにディレクトリ階層構造をなしている。ライセンサー側のコンピュータシステム10においても同様の構成を有するが、重要ではないため、図示を省略してある。

【0020】

ユーザー側のコンピュータシステム20におけるブロック24は、本発明に係るソフトウェアの不正利用防止方法を実現するプログラムの部分であり、該プログラムによって実行される処理を機能ブロックによって概念的に示している。一例として、本発明に係るソフトウェアの不正利用防止方法を実現するプログラムは、①登録プログラムと②プロテクトプログラムとを含んでいる。図1において、概ね、点線矢印は①登録プログラムに従う登録時の処理の流れを示し、実線矢印は②プロテクトプログラムに従うソフトウェア利用時の処理の流れを示している。この①登録プログラムと②プロテクトプログラムは、以下述べる例では別々に構成されるものとしているが、一体的に構成されていてもよい。

【0021】

図2は、本発明に係る不正利用防止方法の対象となるソフトウェアの構造の一例を、①登録プログラムと②プロテクトプログラムに関連して、示す図である。同図（A）は、①登録プログラムが、対象ソフトウェアとは別途に供給される例を示す。この場合は、①登録プログラムは、対象ソフトウェアを提供するライセ

ンサーの側から、対象ソフトウェアの提供を正規に受けようとする（例えば購入しようとする）ユーザーに対して予め提供される。後述する所定の登録手続が完了してから対象ソフトウェアがユーザーに対して提供される。対象ソフトウェアは、該ソフトウェアの本体である「本体プログラム」と、該ソフトウェアをコンピュータにインストールするときに動作する「インストールプログラム」と、インストール済みの該ソフトウェアを起動させる（実行開始）ときに動作する「起動プログラム」とを含み、②プロテクトプログラムを付属している。この②プロテクトプログラムは、「インストールプログラム」と「起動プログラム」の少なくとも一方によって呼び出されて、インストール時及び起動時の少なくとも一方で本発明に従う不正利用防止処理が実行される。

【0022】

同図（B）は、対象ソフトウェアが、②プロテクトプログラムのみならず、①登録プログラムをも付属して具備する例を示す。この場合は、後述する所定の登録手続の前に対象ソフトウェアが提供されることになるが、所定の登録手続を完了させない限りソフトウェアの利用ができないので、特に問題ない。

同図（C）は、最初に①登録プログラムと②プロテクトプログラムだけがユーザーに対して提供され、後述する所定の登録手続が完了してから対象ソフトウェアがユーザーに対して提供される例を示す。

以下の説明では、図2（A）の例のように、①登録プログラムがまずユーザーに提供され、所定の登録手続が完了してから②プロテクトプログラム付の対象ソフトウェアがユーザーに提供される場合を想定して説明する。なお、ライセンサーからユーザーに対するこれらのプログラムあるいはソフトウェアの提供は、通信ネットワークを介してオンラインで行なうことができる。

【0023】

図3は、本発明に従う不正利用防止方法の第一段階である、ソフトウェア利用登録手続の流れを略示するフロー図である。この登録手続は、ライセンサーからユーザーに対して提供された前記①登録プログラムを、ユーザーのコンピュータで起動されることにより、開始される。主に、図3のステップS1, S2, S4が、ユーザーのコンピュータで前記①登録プログラムによって実行される処理で

ある。ステップS3はライセンサーのコンピュータで行なわれる処理である。

この登録プログラムにおいては、まず、ユーザーのコンピュータのファイルシステム情報を読み取り、これを該登録プログラム中で定義される所定の暗号化アルゴリズムに従って暗号化し、これに基づき暗号化された固有情報を生成する（ステップS1）。図1における暗号化器25のブロックは、この暗号化処理を概念的に示すものである。暗号化アルゴリズムはどのようなものでよい。

【0024】

周知のように、コンピュータのファイルシステムとは、コンピュータの中のファイルの階層的な構造のことを指す。たとえばWindows（マイクロソフトの商標）では、プログラムExplorer（マイクロソフトの商標）を用いてこのファイルシステム情報を読み取り、その階層的構造を視覚的に表示することができる機能を有しているので、そのような既存のファイルシステム情報読み取り機能を利用することができる。また、プログラミング言語のファイルI/Oの機能を利用してファイルシステム構造を読み取ることができるので、これによってファイルシステム情報を得ることができる。図4にファイルシステムの例を示す。Cドライブの中に、「古いメール」などのフォルダがあり、さらにその中に、「〇〇商事打ち合わせ」など適宜の名称のつけられた各種のファイルが配置されている。この例からも判るように、個別のコンピュータは個々のユーザーによって異なった仕方で用いられるため、家庭もしくはオフィスで通常の使用方法をする限り、個々のユーザが使用を重ねることでそのファイルシステムは個別の各コンピュータ毎に特有のものとなる。言い換えると、OSがインストールされた直後などの特殊な場合を除けば、ファイルシステム情報は個別の各コンピュータ毎に固有の情報であるとみなして差し支えない。よって、ファイルシステム情報を個別コンピュータ毎の固有情報として利用し、後述するように、これに基づき個別コンピュータ毎に固有のキーデータを作成することができる。

【0025】

なお、ステップS1で暗号化された固有情報には、ファイルシステム情報のみならず、ファイルシステム以外の他の情報（例えば現在のコンピュータシステムを記述する他の情報）を含んでいてもよい。要するにファイルシステム情報を少

なくとも含むものであればよい。また、ユーザーのコンピュータの全てのファイルシステム情報を使用せずに一部のファイルシステム情報（例えば所定の一部ドライブあるいは所定の1又は複数のフォルダのファイルシステム情報）のみを使用して暗号化された固有情報を生成するようにしてもよく、これも本発明の範囲に含まれる。なお、ステップS1での暗号化処理は、後日、不正利用者がキーデータの解読を不正に行なおうとする場合に、その解読を困難にするためである。よって、場合によっては、ステップS1での暗号化処理は省略可能である。

【0026】

次に、生成したファイルシステム情報に基づく暗号化固有情報を、ユーザーからライセンサーに対して送付する（ステップS2）。この固有情報の送付は、通信ネットワークを介してオンラインで行なうことが好ましいが、可搬性媒体を介してオフラインで行なうようにしてもよい。

【0027】

ライセンサーの側では、ユーザーから該ユーザーの使用するコンピュータに固有のファイルシステム情報に基づく暗号化固有情報を受け取ると、所定の変換アルゴリズム（この変換アルゴリズムは暗号化アルゴリズムであることが、不正利用者の解読を防ぐ上で、好ましい）に従って該暗号化固有情報を変換し、キーデータ（正規利用を許可する鍵となるデータ）を生成する（ステップS3）。図1における変換器11のブロックは、この変換処理を概念的に示すものである。こうして、ユーザーの使用するコンピュータに固有のファイルシステム情報に基づきキーデータが作成される。このキーデータは、ライセンサーからユーザーに対して送付され、ユーザでは、受け取ったキーデータを自己のコンピュータに保存する（ステップS4）。このキーデータの送付も、通信ネットワークを介してオンラインで行なうことが好ましいが、可搬性媒体を介してオフラインで行なうようにしてもよい。勿論、キーデータをコンピュータに電子的に保存することをせずに、ライセンサーからユーザーに対して通知されたキーデータをユーザが覚えておき、必要なときにコンピュータに入力するようにしてもよい。

【0028】

こうして、ライセンサーからユーザーにキーデータが渡されることでユーザ登

録手続が完了する。対象ソフトウェアは、このユーザ登録手続の前又は後の適宜の段階でライセンサーからユーザーに供給される。この対象ソフトウェアの供給も、通信ネットワークを介してオンラインで行なうことが好ましいが、可搬性媒体を介してオフラインで行なうようにしてもよい。

【0029】

次に、本発明に従う不正利用防止方法の第二段階である、上記②プロテクトプログラムの動作例を図5に示す機能フローチャートを参照しながら説明する。このプロテクトプログラムは、ユーザーが対象ソフトウェアを自己のコンピュータにインストールするとき、あるいはインストール済みの該ソフトウェアを起動するときに、該ユーザのコンピュータで実行される。インストール時にこのプロテクトプログラムを起動させる場合は、対象ソフトウェアのインストールプログラムの実行時にこのプロテクトプログラムが呼び出されて実行され、その結果ソフトウェア利用可と判定されたならばインストールを行なうことが許可される。また、インストール済みの該ソフトウェアの起動時（ソフトウェア実行開始時）にこのプロテクトプログラムを起動させる場合は、対象ソフトウェアの起動プログラムの実行時にこのプロテクトプログラムが呼び出されて実行され、その結果ソフトウェア利用可と判定されたならば該ソフトウェア本体の実行を開始することが許可される。このプロテクトプログラムは、インストール時とソフトウェア起動時のどちらか一方に限らず、両方の時点で実行してもよい。

【0030】

プロテクトプログラムがスタートすると、まず、キーデータを検索し、キーデータが存在するかどうかを判定する（ステップST1）。このキーデータ検索の手法としては、プロテクトプログラムに従って表示される入力画面においてユーザーによるキーデータの所在場所情報の入力を受け付け、入力された所在場所情報からキーデータを取得する方法、あるいは、あらかじめ指定されたディレクトリを検索してキーデータを取得する方法、あるいは、コンピュータの記憶領域を隅からしらみつぶしに検索することでキーデータを取得する方法、など適宜の手法を用いてよい。ここで、キーデータが存在しないと判定された場合は、対象ソフトウェアの利用を不許可とする（ステップST2）。

【0031】

ステップST1によりキーデータが存在することが確認された場合は、このキーデータを逆変換することによって元の暗号化固有情報を生成する（ステップST3）。図1における逆変換器26のブロックは、このステップST3における逆変換処理を概念的に示すものである。この逆変換器26における逆変換アルゴリズムは、前記登録手続時におけるライセンサー側の変換処理（図3のステップS3又は図1の変換器11）による変換アルゴリズムの逆であり、これによりキーデータを変換前の暗号化固有情報に復元する。

【0032】

次に、復元された暗号化固有情報の暗号化を解除（復号）し、元のファイルシステム情報を含む固有情報を復元する（ステップST4）。図1における復号化器27のブロックは、このステップST4における復号処理を概念的に示すものである。復号化器27における復号アルゴリズムは、前記登録手続時における暗号化処理（図3のステップS1又は図1の暗号化器25）による暗号化アルゴリズムの逆であり、これにより該暗号化固有情報の暗号化を解除して元のファイルシステム情報を含む固有情報を復元する。

【0033】

一方、ユーザーのコンピュータの「現在のファイルシステム情報」を適宜の時点で読み取り、これに基づき該ユーザーコンピュータの「現在の固有情報」を提供する（ステップST5）。このステップST5の処理は、ステップST1, ST3, ST4のいずれかのステップの前で行なってもよい。また、ユーザーコンピュータの「現在のファイルシステム情報」を読み取ることは、さらに前の適当な時点で行なっておいて、これを保存しておき、保存した「現在のファイルシステム情報」をこのステップST5で呼び出すようにしてもよい。前述のように、プログラミング言語のファイルI/Oの機能を利用することで、ファイルシステムの情報を取得することができる。また、このステップST5で復元するユーザーコンピュータの「現在の固有情報」には、前述のように、ファイルシステム情報のみならず、ファイルシステム以外の他の情報を含んでいてもよく、要するにファイルシステム情報を少なくとも含むものであればよい。また、ユーザーのコ

ンピュータの全てのファイルシステム情報を使用せずに一部のファイルシステム情報のみを使用して暗号化された固有情報を生成するようにしてもよい。ただし、前記登録手続時におけるキーデータ生成の元となったファイルシステム情報を含む固有情報と同じ種類の情報であることを要する。

【0034】

次に、ステップST4で得られた「元の固有情報（つまり元のファイルシステム情報）」とステップST5で得られた「現在の固有情報（つまり現在のファイルシステム情報）」とを比較し、両情報の差分を求める（ステップST6）。この差分は数値として計算する方法も、ベクトルとして計算する方法も考えられる。たとえば、元の固有情報から得られたファイルシステムに含まれるファイルの集合と、現在のファイルシステムに含まれるファイルの集合をとって、前者と後者の両方に含まれる（一致する）ファイルの個数Aと、前者または後者のいずれか一方にしか含まれない（一致しない）ファイルの個数Bとから、差分Cを下記式で計算するやり方が一例として考えられる。

$$C = B \div (A + B)$$

この差分計算法によると、二つのファイルシステムが完全に一致した場合は、B = 0であるから、差分Cは0となり、最小値をとる。二つのファイルシステムの一方にしか含まれないファイルが増えるほど、Bが増すことから、差分Cの値が大きくなり、二つのファイルシステムが同名のファイルを一つも含まないときは、A = 0であることから、差分Cは最大値である1をとることになる。つまり、差分Cは、0から1までの範囲の小数値をとり、その値が0に近いほど一致度／類似度が高い。

【0035】

次に、比較結果つまり差分Cが所定の許容限界を越えているかどうかを判定する（ステップST7）。図1における比較・判定器28のブロックは、このステップST6、ST7における比較・判定処理を概念的に示すものである。もし、この比較結果つまり差分が許容限界を越えていなければソフトウェアの利用を許可する（ステップST8）。例えば、実行中のプログラム（インストールプログラムまたは起動プログラム）を続行させる。この比較結果つまり差分が許容限界

を越えているならば、ソフトウエアの利用を不許可とする（ステップST9）。例えば、不許可のメッセージをコンピュータディスプレイに表示して、プログラム（インストールプログラムまたは起動プログラム）を停止する。

【0036】

例えば、キーデータ作成時つまり登録時からみて、ユーザー側のコンピュータのファイルシステム情報に変更がなければ、両ファイルシステム情報が一致する。これは、ユーザー側の現在のコンピュータが、登録時のキーデータ作成の元となったファイルシステム情報に係るコンピュータと明らかに同一であることを意味する。よって、ソフトウエアの利用を許可するのは勿論である。例えば、登録時にキーデータを取得した後すぐに対象ソフトウエアをインストールしようとする場合がそのような完全一致のケースに該当する。

一方、ユーザー側のコンピュータの使用に伴ってそのファイルシステム情報の内容が当然変わってくる。そのような場合、ステップST4で復元された「元のファイルシステム情報」とステップST5で読み取られた「現在のファイルシステム情報」とは相違してくるが、ステップST7では両者の相違が許容範囲内であれば、類似性を認め、ユーザー側で使用するコンピュータに変わりがないと認定して、ソフトウエアの利用を許可する。この許容限界値は、ライセンサーが自らの責任で予めプロテクトプログラムに設定しておくものとする。

【0037】

一方、登録時にオーソライズされたコンピュータ（キーデータを作成する元となったファイルシステム情報に係るコンピュータ）以外の他のコンピュータで当該ソフトウェアを不正にインストール又は使用開始しようとするときには、仮りにオーソライズされたコンピュータの正規のキーデータを知得したとしても、ステップST5で読み取られた「現在のファイルシステム情報」は、当該他のコンピュータのファイルシステム情報であるから、該正規のキーデータに基づき復元したファイルシステム情報とは、明らかに相違する。よって、ステップST7では両者に一致又は類似性がない、つまり両者の相違が許容範囲外、と判定し、ソフトウエアの利用を不許可とすることができます。従って、判定の基準となる許容限界値が適切に設定されていれば、ソフトウエアの不正利用を適切に防止するこ

とができる。

【0038】

ところで、オーソライズされたコンピュータであっても、使用に伴ってそのファイルシステム情報がどんどん変化してゆく。そのため、そのままでは、キーデータによって復元される元の（ユーザー登録時の）ファイルシステム情報と現在のファイルシステム情報との相違が大きくなり、許容範囲を越えて、非類似と判定されることになりかねない。これに対処するために、現在のファイルシステム情報に適合するように、キーデータの内容を適応更新するとよい。

そのために、ソフトウェア利用許可の判定がなされたことを条件に、ステップST9においてキーデータの適応化更新を行なう。すなわち、ステップST5で読み取られた「現在のファイルシステム情報」に適合するようにキーデータの内容を更新する。図1における適応化器29のブロックは、このステップST9における適応化更新処理を概念的に示すものである。図6は、このキーデータ適応化更新処理の一例を示すフロー図である。利用許可の判定がなされたことを条件にステップST90に行き、「現在のファイルシステム情報」に基づき暗号化した固有情報を生成する。この暗号化のために、図3のステップS1における暗号化アルゴリズムと同じ暗号化アルゴリズムを用いる。次にステップST9.1では、暗号化された固有情報をキーデータに変換する。この変換のために、図3のステップS3におけるライセンサー側の変換アルゴリズムと同じ変換アルゴリズムを用いる。こうして、作成された新しいキーデータによってユーザーコンピュータで保存している古いキーデータを更新するつまり置き換える（ステップST92）。利用不可の場合は、ステップST90～ST92によるキーデータ更新が行なわれない。なお、ステップST90では、前のステップST5で読み取られた「現在のファイルシステム情報」をそのまま使用してもよいし、あるいは「現在のファイルシステム情報」を読み取る処理をあらためて行ってよい。後述するようにこのキーデータ適応化更新処理を任意の時点で行うようにする場合は、このステップST90で「現在のファイルシステム情報」を読み取り、読み取った「現在のファイルシステム情報」に基づき暗号化した固有情報を生成する。

【0039】

キーデータ適応化更新処理はできるだけ頻繁に行ない、適切なキーデータ更新が常になされることが望ましい。対象ソフトウェアの使用起動時にプロジェクトプログラムを実行する仕様においては、上記のようにプロジェクトプログラム中にステップST9としてキーデータ適応化更新処理が組み込まれた仕様であれば、該対象ソフトウェアを起動させるたびにキーデータ適応化更新処理を行なうことができる。その場合にあっては、対象ソフトウェアが頻繁に使用するソフトウェアであるならばキーデータ適応化更新処理が比較的十分に行なわれることになる。しかし、対象ソフトウェアが頻繁に使用しないソフトウェアである場合には、キーデータ適応化更新処理を実行する回数が不足し、該ソフトウェアを使用しない間にファイルシステムが大幅に変化することが大いにありうるので、キーデータに対応する古い固有情報（ファイルシステム情報）が現在の固有情報（ファイルシステム情報）と著しく異なることとなり、正規のユーザーに対して使用不許可の判定が下されるおそれが出て来る。一方、対象ソフトウェアのインストール時にのみプロジェクトプログラムを実行する仕様においては、上記のようにプロジェクトプログラム中にステップST9としてキーデータ適応化更新処理が組み込まれた仕様のみでは、キーデータ適応化更新処理の実行が不足する。

【0040】

以上のようなキーデータ適応化更新処理の実行の不足に対処するために、コンピュータでOSを起動するたびに、もしくは一定時間ごとに、その他適宜の時点で、図6に示されるキーデータ適応化更新処理を実行するようにすればよい。その場合、最新のソフトウェア利用可否判定結果を記憶しておき、最新の判定結果が利用可の場合にのみ、ステップST90～ST92のキーデータ更新処理を行なうようにすればよい。具体的には、このキーデータ適応化更新処理を実行するプログラムをコンピュータの起動時に自動的に実行されるプログラムのリストに加えておけば十分である。たとえば、Windows（マイクロソフト社の商標）ではスタートアップファイルとして登録しておけばよい。

【0041】

本発明に係る不正利用防止方法においては、使用可と判定する前記許容限界の範囲を広くとりすぎると、不正ユーザーを誤って正規ユーザーと認識する可能性

がある。逆に、前記許容限界を狭くとりすぎると、ファイルシステムに急激な変更を加えた場合に、正規ユーザも誤って不正と認識される可能性が高まる。また、ユーザーサービスのためにキーデータを喪失または紛失した場合にキーデータ再発行サービスを行なうことが考えられるが、そのようなキーデータ再発行サービスを悪用して、悪意あるユーザーが別コンピュータの固有情報をを利用してキーデータの再発行を要求し、複数のコンピュータでソフトウェアを不正に利用することも不可能ではない。したがって、本発明に係る不正利用防止方法は、全く完全な不正利用防止策を提供するものではない。したがって、本発明に係る方法を有効に実施するためには、ライセンサーが自らの責任において使用可否判定の許容範囲若しくは限界値を適切に設定する必要がある。

【0042】

ただし、前記のような不都合があっても、容易にコピーできるパスワードによる従来の不正利用防止方法と比較すれば、本発明の方法に格段の防止力がある。たとえば、従来のパスワード方式では口頭あるいは電子メールなどによって誰にも見つかることなく不正に他人にパスワードを教えることが可能であり、容易に多人数に伝わりうる。しかし、本発明に係る不正利用防止方法では、仮りに不正利用者がプロテクトプログラムに誤認識させる目的でファイルシステムに作為を施そうとしたとしても、まず、キーデータに対応するファイルシステム構造を解読した上で、コンピュータのファイルシステムをそれに合わせて改造しなければならず、多大な手間がかかり、到底、引き合わないものとなる。また、メールで不正にキーデータの再発行を要求しようとしたとしても、心理的な敷居は高く、またそのような不正な要求を高い頻度で繰り返せば不正が明らかになる、などの種々の事情からパスワードによる従来の防止方法と比べて、不正コピーが広まる恐れは格段に少ないと考えられる。

【0043】

以上のように、本発明によれば、ライセンサーが許容限界を適切に設定している場合には、ユーザーがソフトウェアを利用するコンピュータの暗号化固有情報をライセンサーに伝え、正規のキーデータを受け取らない限り当該ソフトウェアをコンピュータで利用することが出来ないので、ソフトウェアの不正利用を有効

に防止することができる。また、正規ユーザーであっても1つのソフトウェアを固有情報の異なる他のコンピュータに対してインストールすることは出来ない。よって、ソフトウェアの不正利用防止効果が大である。

なお、インストール時またはソフトウェア起動時に限らず、ソフトウェアのコピー時に本発明に従うプロテクトプログラムを起動させて、不正コピーを禁止するようにしてもよい。また、インストール時にのみ本発明のプロテクトプログラムを実行するものとし、かつ、キーデータ受領時に連続してインストール処理も行なうものとする仕様も可能であり、そのような仕様にあっては、キーデータ適応化更新処理（ステップST9、図6）は省略可能である。

【0044】

なお、図1に示す例では、比較・判定器28のブロックでは、ファイルシステム情報に基づく固有情報同士（つまり暗号化解除した情報同士）で比較を行っているが、この逆に、検出した「現在のファイルシステム情報」を暗号化及び変換して、それに対応するキーデータを生成し、該生成したキーデータと保存してあるキーデータとの比較（つまり暗号化したデータのままの情報同士の比較）によって、利用可否の判定を行うようにしてもよい。しかし、その場合は、不正利用者によるキーデータの改竄の危険性が高まるので、あまり得策ではない。よって、上記実施例に示したようにファイルシステム情報に基づく固有情報（つまり暗号化解除した情報同士）で比較を行う方が得策である。しかし、不利はあるとしてもキーデータ同士で比較する実施態様も、ファイルシステムの特徴に基づきソフトウェアの利用可否を判定するという本発明の技術思想に含まれるものであり、本発明の範囲に含まれる。

【0045】

なお、本発明は、必要とあらば、ソフトウェア不正利用防止装置という専用ハードウェアの形態で実施することも可能であり、その場合も本発明に従う効果・利点を享受することができる。よって、本発明に従う不正利用防止方法を専用ハードウェア装置で実現しうるよう構成した実施の形態も本発明の範囲に含まれる。

【0046】

【発明の効果】

以上の通り、本発明によれば、ユーザー側の個別コンピュータに固有の情報として該コンピュータのファイルシステム情報に着目し、該ファイルシステム情報に基づき個別コンピュータに固有のキーデータを作成して、ソフトウェアを利用して評価することでその利用の可否を判定するようにしたので、完全なソフトウェア処理ベースで不正利用を防止することができ、通信ネットワークを介して流通するソフトウェアの不正利用防止対策として最適であり、また、ハードウェアキーが不要であり、格別の可搬性記録媒体の形態で対象ソフトウェアを提供しなければならないような面倒もなく、ローコストであり、ソフトウェア提供者の側において各オペレーティングシステム毎に対象ソフトウェアを作成しなければならない面倒もなく、更には、オペレーティングシステムによる制限を受けないので「クロスプラットホーム」タイプのソフトウェアにも適用することができる、等々の優れた効果を奏する。

【図面の簡単な説明】

【図1】 本発明に係るソフトウェアの不正利用防止方法の原理を示す機能ブロック図。

【図2】 本発明に係る不正利用防止方法を実現するプログラム及び対象ソフトウェアの構造を例示する略図。

【図3】 本発明に係る不正利用防止方法に従う登録手続の一例を示すフロー図。

【図4】 ファイルシステムの一例を示す概念図。

【図5】 本発明に係る不正利用防止方法に従うプロテクトプログラムの一例を示すフロー図。

【図6】 キーデータ適応化更新処理の一例を示すフロー図。

【符号の説明】

- 10 ライセンス提供者側のコンピュータシステム
- 20 ユーザー側のコンピュータシステム
- 21 コンピュータハードウェア

特2000-370630

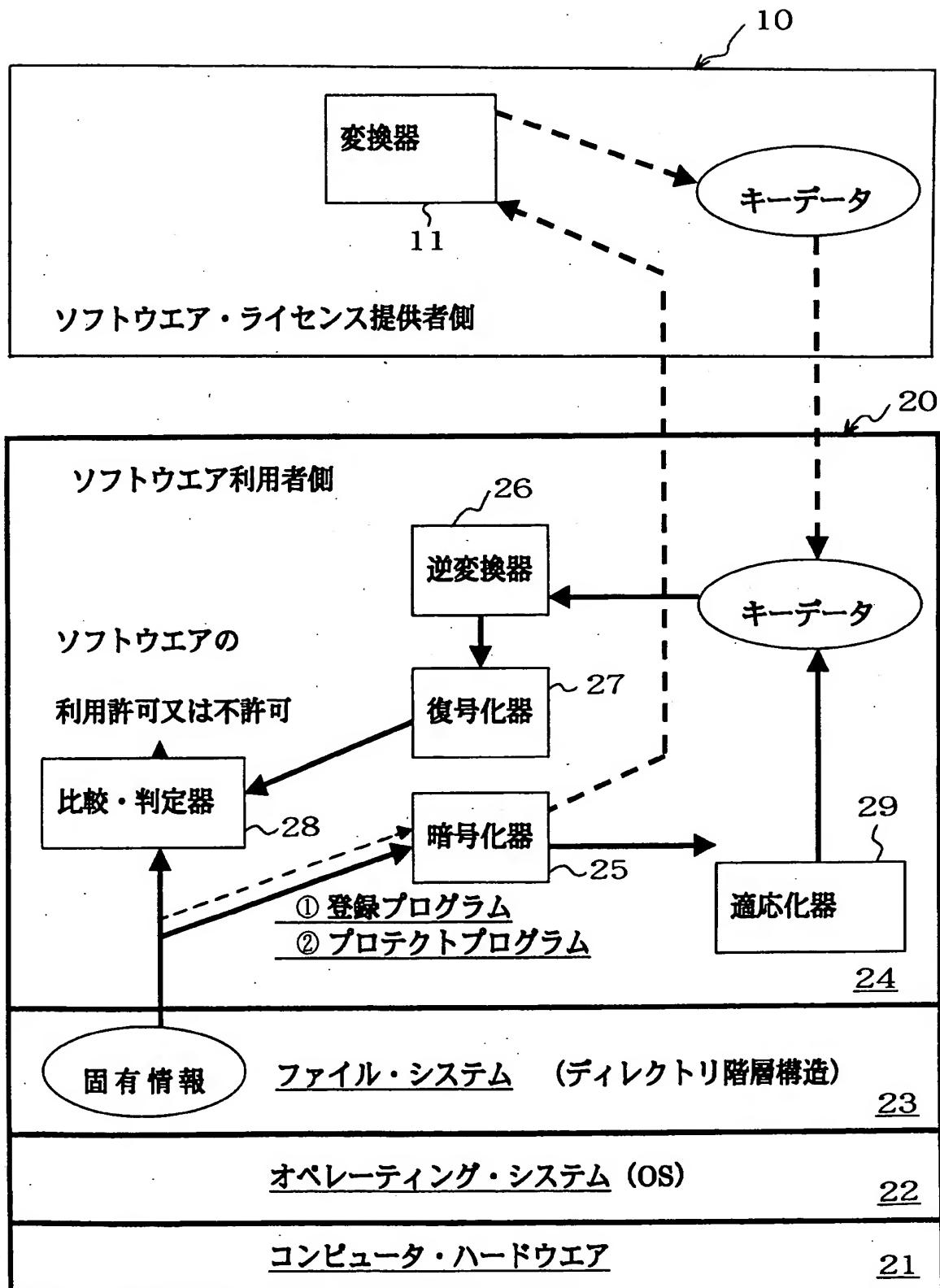
22 OS

23 ファイルシステム

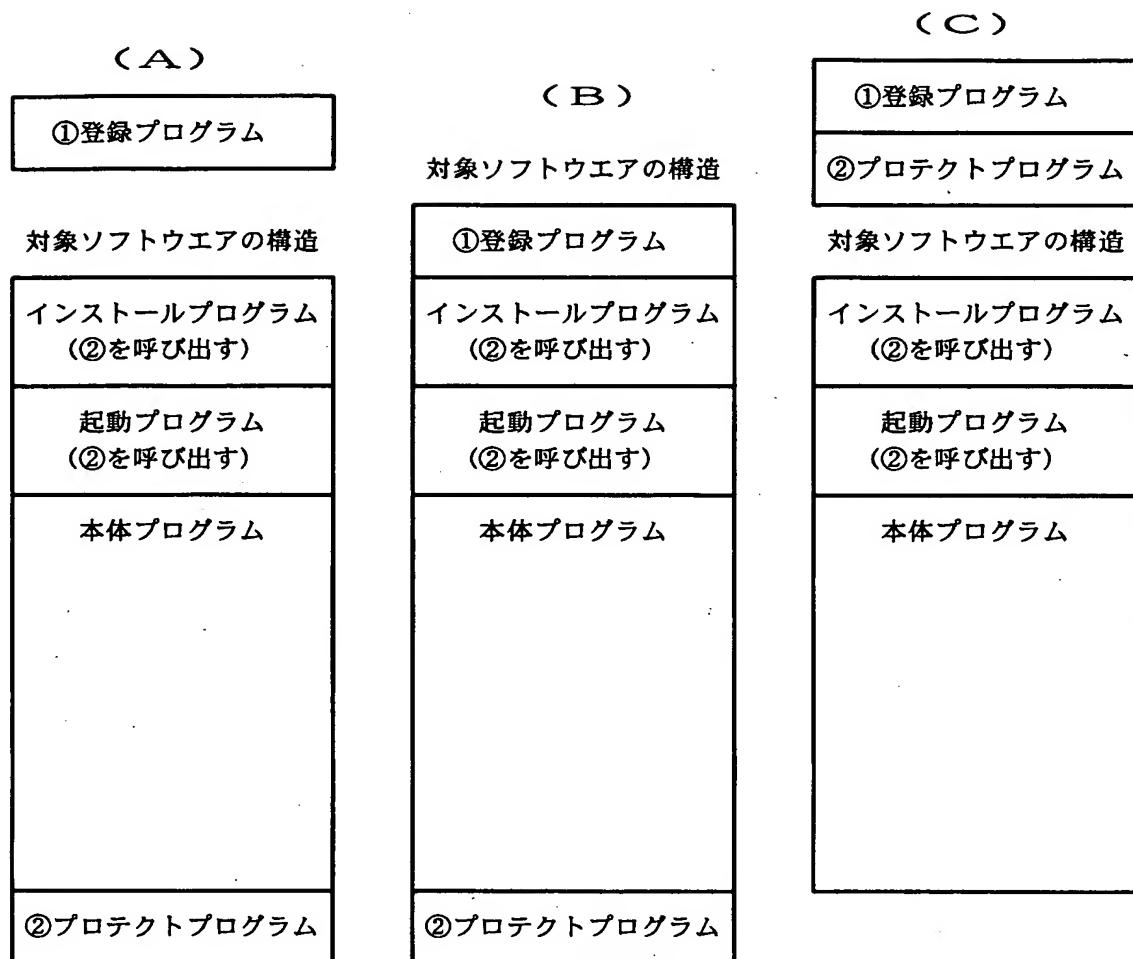
【書類名】

図面

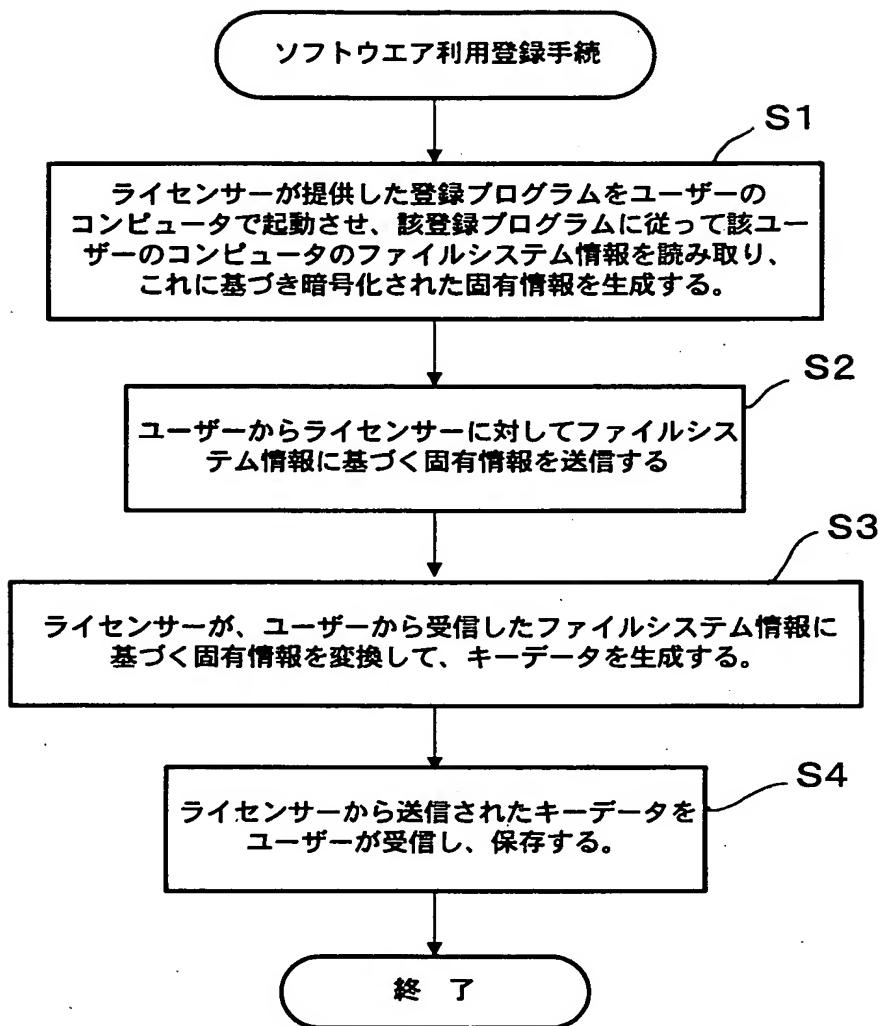
【図1】



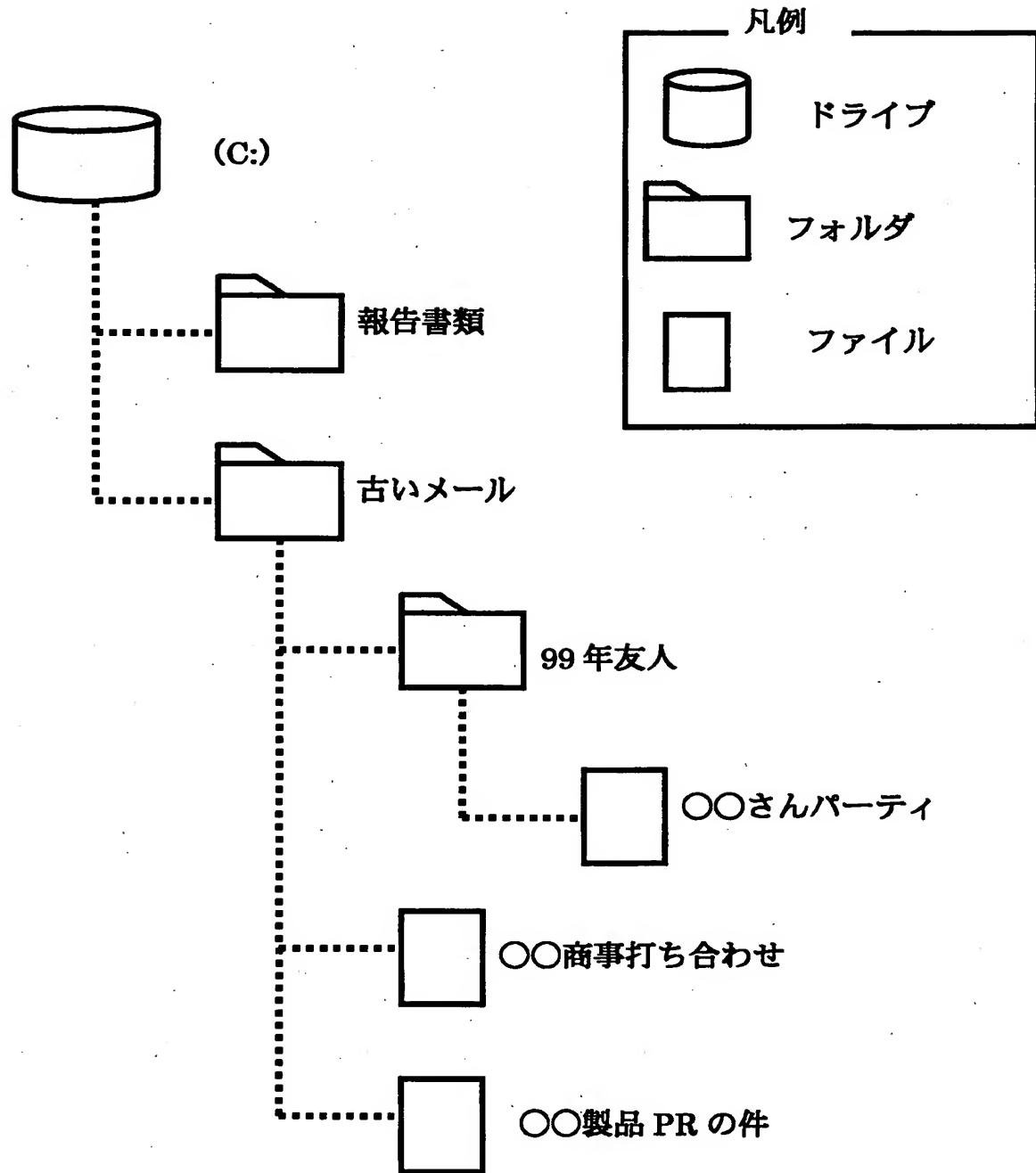
【図2】



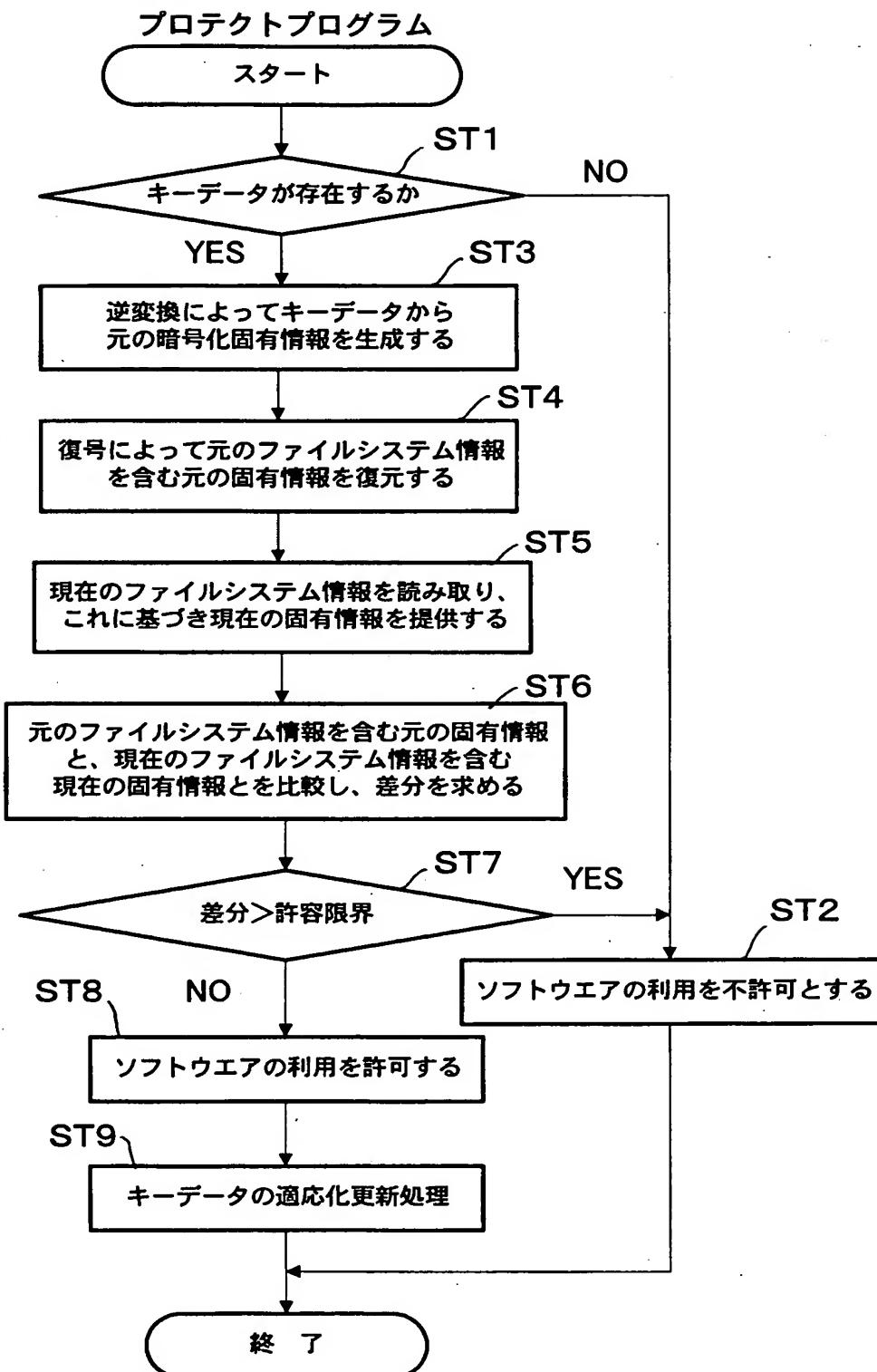
【図3】



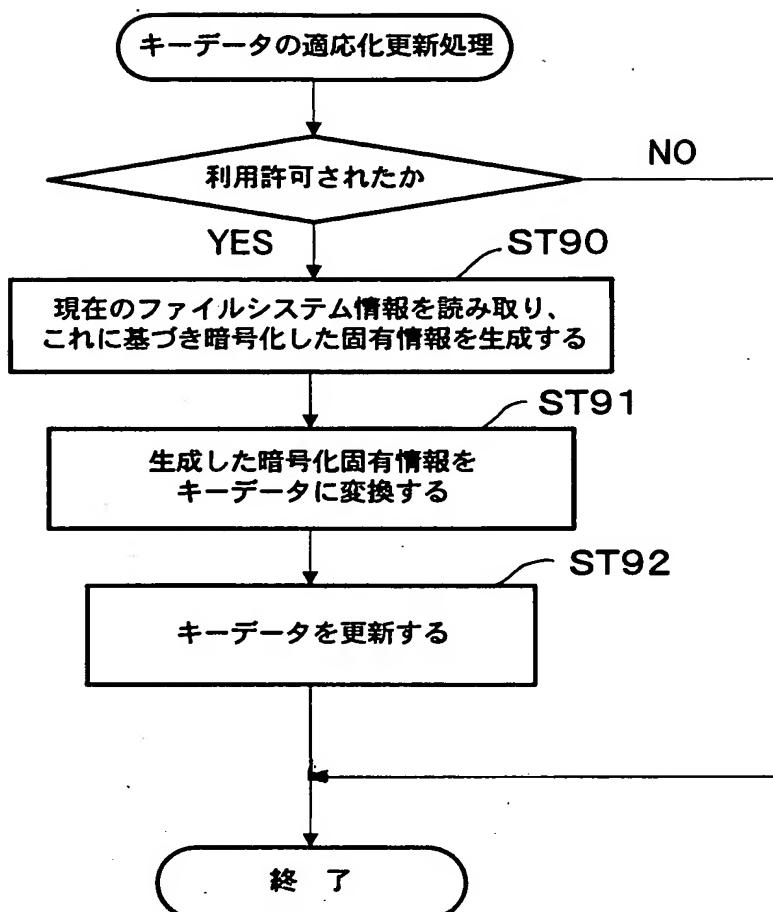
【図4】



【図5】



【図6】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 ライセンサーが許可した特定のコンピュータにおいてのみソフトウェアを利用可能にすることで、該ソフトウェアの不正利用を防止する。このことをOS毎のID付与やハードウェアキーによらずに純ソフトウェア処理で実現可能とする。

【解決手段】 ユーザーのコンピュータのファイルシステムの特徴を抽出し、これに基づきライセンサーの側で該ユーザーコンピュータのファイルシステムの特徴に固有のキーデータを生成し、ユーザーに付与する。ユーザーコンピュータの側では、対象ソフトウェアのインストール時あるいは使用開始時（起動時）などにおいて、自己のコンピュータのファイルシステムの現在の特徴を読み取り、この現在の特徴と前記キーデータに基づく登録時のファイルシステムの特徴との一致度又は類似性に基づいて、該ソフトウェアの利用の可否を判定する。利用許可されたことを条件に、ファイルシステムの現在の特徴に適合するように、キーデータを更新するとよい。

【選択図】 図1

認定・付加情報

特許出願の番号	特願2000-370630
受付番号	50001569167
書類名	特許願
担当官	第七担当上席 0096
作成日	平成12年12月 8日

<認定情報・付加情報>

【提出日】 平成12年12月 5日

次頁無

出願人履歴情報

識別番号 [500557912]

1. 変更年月日 2000年12月 5日

[変更理由] 新規登録

住 所 神奈川県相模原市古淵一丁目23番9号
氏 名 堀 健太